

# 漢詩をひもとく午後

俳人・エッセイスト 小津 夜景

おつ やけい



この世は何が仕事にむすびつくかわからない。

わたしの場合は漢詩の翻訳がそうだ。翻訳といっ

ても中国語を知らず、読み下しを現代語に直しては

一人楽しんでいたにすぎないから、これが仕事にな

ると思ったこともなかった。それなのに縁あって、

先月二冊目の漢詩翻訳&随筆集『いつかたこぶねに

なる日』が刊行されたのだから妙なものである。

古来より日本人は「春眠暁を覚えず」とか「君に

勸む さらに尽くせよ一杯の酒を」などと漢詩を訓

読して味わってきた。つまり日本人にとって漢詩は

定型詩ではなく、不均衡の韻律美を味わう自由詩だ

った。漢詩の訳というと「花に嵐のたとえもあるぞ

／サヨナラだけが人生だ」みたいな定型調を思い浮

かべる人が多いだろうけれど、もともと自由詩とし

て享受されていたものをわざわざ懐メロっぽい節回

しに直すこともないので、わたしは自由詩のかたち

に翻訳することが多い。

サマルカンドは

ひっそりと静まりかえり

見わたすかぎりの甍は

過ぎ去りし日々の

輝かしい面影をそのまま残している

ひとびとは

みずからの手でワインを醸す

アーモンドの白い花が

そこらじゅうに咲きほころんでいる

香辛料をすりこんだ肉をたらふく食い

馬の頭ほどもある瓜を割ってかぶりつく

人生とはおいしいものを食べることに

そのためなら

流沙を越えるのだから苦にならない

(耶律楚材「西域の河中で 十詠 その一」)

耶律楚材はモンゴルが中国に攻め入った折に捕虜

となったものの、家柄の良さやもの怖じしない態度

時の調べ  
Essay

がチンギス・ハンに気に入られ、中国語担当の書記官としてハンの側近になった詩人である。

こういった土地の香りや風物、人間の営みなどを仔細に観察した作品が好みで、ロマンチックな地名が出てきたりするといっそう嬉しい。もうひとつ例をあげると、平安時代に書かれた源順「白をうたう」（原題「詠白」）は作者の愛する白のイメージをつぎつぎ列挙してゆく『枕草子』みたいな作品なのだけれど、その頷聯に、



満ちくる潮にしらじらとかがやく  
蘆そよぐ中洲の月の色

山なみの雪にえんえんとつらなる  
パミール高原の雲の肌

と、パミール高原が登場する。くらくらするほど典雅な趣味ではないか。平安時代の人も書物を読んで異国の風景を空想していたんだなあと考えるとなんだか感慨深い。

このような素晴らしい白をつぎつぎと並べ、ついにはパミール高原まで想像の翼をひろげたあと、源順はラストの尾聯をこんなふうに着める。

霜夜の鶴 砂浜の鷗

どれもこれもみな愛すべき白たち

ゆいいつ嫌なのは

年とともに髪が白くなってゆくこと

美しい白。愛らしい白。そしてほんのり悲しい白。いまだ見ぬ遙かな光景からささやかな日常までを繊細な審美眼で捉えたこの詩を、わたしは王朝漢詩屈指の名盤だと確信している。



略歴  
1973年北海道生まれ。2000年よりフランス在住。2013年「出アパラヤ記」で攝津幸彦賞準賞。2017年句集『フラワーズ・カンフー』で田中裕明賞。2018年漢詩翻訳&エッセイ『カモメの日の読書漢詩と暮らす』。近刊『漢詩の手帖 いつかたこぶねになる日』。好きなものは海と空。